

在宅勤務における経験と語り

——日常の実践としての在宅勤務と社会的に語られてきた在宅勤務——

藤井 貴大

1. 本研究の目的

本研究は在宅勤務を捉え直すことを目的としている。そのための方法として人々に形成されている一般的な理解と実際に就労している人の経験とを比較することを行った。一般的な理解としてマスメディアである新聞記事を対象として分析し、経験的理解として実際に自宅で就労している人に対しインタビュー調査を行った。

2. 本研究の視座

これまでの在宅勤務をめぐる研究においては、在宅勤務はテレワークという働き方のサブカテゴリとして位置づけられてきた。テレワークは通信技術を利用して場所や時間を問わずに働ける働き方として定義されており、その中で在宅勤務に対しては家という場所で働く形態として位置づけられていた。しかし、こうした捉え方は、実際に働いている際の具体的な社会的状況をみる視点が欠けていた。それは場所が変わった際に、実際に働く状況に変化が生じるという視点が欠けていることを意味している。

また、この働く具体的な状況を考えずに捉える視点からは、情報通信機器を用いれば仕事が劇的に変わるというような技術中心主義的な見方をみることができ。具体的には、実際の「場所」をめぐっての社会的文脈や働き方や経験といったものが考えられていない点が挙げられる。それは就労する「場所」が概念的に「会社」から「家庭」へと置換えられているだけで、概念的に同型として語られているというものである。そしてその置き換えに際しては情報技術が自宅での就労を可能にしたことを手がかりとして行われていたのだ。この情報技術が可能にした置き換えは、家庭をめぐる様々な社会的文脈を無視している点でアナロジーに陥っていると言える。

こうした記号化されたテレワークのアナロジーから抜け出すために、具体的に家庭空間を捉える必要がある。それは家庭空間の力学という個々の家庭の中に存在する固有の様々な規範や、情報エコロジーという様々な物質的なものが織りなす空間を、作業を形成する環境として捉え、人々の実践活動というミクロな視点から考えることである。こうした家庭という社会的状況を設定し、その文脈の中で人々がいかに実践しているのかを考えることが、アナロジーに陥らずに在宅勤務を捉えなおす際に有効である。

3. 分析と考察

この捉え直しに際する調査として、新聞の紙面に対する言説分析と、実際に自宅で就労している人々に対するインタビュー調査を行った。新聞分析からは、当初は技術中心主義的な語られ方がみられたものの、次第に育児やライフスタイルの形成など目的に沿った在宅勤務の利用法が見られるようになっていった様子を見ることができた。

インタビュー調査からは、若い子どもを育てるために在宅で働くことを選んだという語りも見ることができたが、家族と過ごす時間を大切にしたいという育児のためだけでない

考え方で在宅勤務を行っていることも見えてきた。これから育児のためだけの在宅勤務ではなく、何を大切に生活するかという価値観を実現するための在宅というあり様が見えてくる。社会的語りの中で位置づけられていた在宅勤務という働き方は、ワークライフバランスという価値観を満たすものであったが、その傾向があることは日常実践の語りからも確認することができたといえる。それは例えば平日の学校行事への参加が可能になったことがそうである。一方フルタイムでの在宅勤務の場合、一般的な語りにおける在宅勤務で働くことのメリットを全部達成することは難しく、一口に在宅勤務が可能にすると言われるメリットを達成することはできないことがわかった。そこでどのような効果が生まれるかは、在宅勤務という働き方の実践方法や、個々の家庭における生活の文脈が影響を与えていた。

また、インタビューからは社会的語りから削られた語りを二点見ることができた。それは「ライフステージの変化による在宅勤務実践の変化」と、「情報通信機器の選択的利用」である。「ライフステージの変化による在宅勤務実践の変化」という点では、新聞言説においては、男性の育児・家事参加に役立つと言われてはいたものの、それは導入する際の目的であって、導入後に意図せざる変化が起きることは語られてはいなかった。実際には家庭内の人びとが年齢を重ね、進学や就職によりライフステージを変化させていく中で、その都度、何ができるのかということを再帰的に捉え直し、家庭内における自身の位置づけを再考していたことがわかった。「情報通信機器の選択的利用」では、情報通信機器が社会的に普及したために在宅勤務でいかに利用されているかということに対する語りも、社会的語りから見ることができなくなっていた。一方、経験的語りからは、情報通信技術の利用に関しても様々なこだわりや効率化を目的として工夫して利用を行っている様子が見られた。情報通信技術が一般化したからこそ、何をどのように用いるのか、という選択が可能になったといえる。そうした情報通信機器との関わりも、在宅勤務の中にまた織り込まれている。家庭空間の中には「情報エコロジー」と言うべきアーティファクト同士が織りなす環境が存在し、そしてその中で人々が実践として環境の調整や道具的・選択的利用を行っている。これも社会的語りの中から削られた語りである。

4. 結論

本研究の成果として、これまで概念的に捉えられてきたテレワークのサブカテゴリとしての在宅勤務を、日常実践という経験的な立場から捉え直すことができた。それはインタビューを通じた経験的語りを見ていくことで可能になった。これにより情報化社会論におけるアナロジーにとらわれず、在宅で働くことを捉えることができた。こうした視点からテレワーク、さらには在宅勤務をとらえることはこれまでになかった試みであり、本研究の大きな意義といえるだろう。

また在宅勤務に関する二つの語り、社会的語りと経験的語りの比較を行うことでより在宅勤務が社会的にどのように位置づけられ、また人々の営みの中でどのように実践され認識しているのかを明らかにすることができた。この比較を通して新聞では細かすぎて語るることができない、生活感にあふれた日常実践を聞くことができたのは大きな成果である。これは日常実践という視点から捉えることによって可能なものであり、在宅勤務に関する研究に対し新しい視点を加えることができた。